



Ishikawa Atsuko

石川 敦子

木材改質研究領域



Kakinokihara Masahiro

柿木原 政広

アートディレクター



Miyamoto Kohta

宮本 康太

複合材料研究領域

森林総合研究所(つくば)の実験住宅にて
Photo by Godo Keiko

木には、だれもが認める素材の良さがあります。

しかし、さまざまなマテリアルが登場するなかで、

木の長所をどのようにアピールしたらよいのか？

アートディレクターの柿木原政広さんと石川敦子 木材改質研究領域長、
宮本康太 複合材料研究領域複合化研究室長にお話をいただきました。

木材利用をどう ブランディングするか？

宮本 ● 柿木原さんには日本木材加工技術協会のロゴマーク作成*で大変お世話になりました。私はその委員長を務めました。柿木原さんとの打合せで、協会の成り立ちや今後のビジョンがわからないと創作できないと鋭い指摘をいただいたことをよく覚えています。

柿木原 ● 自分としては、ロゴ単体で何かを物語るといふより、やはり、そこにある背景を理解した上で物作りをしたいんですね。

宮本 ● 柿木原さんからたくさんの質問をいただいて、わたしたちも協会がどのように成り立ってきたのか改めて資料を見直したり、これから木材の加工技術や利用方法がどのような方向に進むのかというヴィジョンをみつめ直すいい機会になりました。

柿木原 ● 近頃はだいたい木材が使われ始めていると新聞などでは読んでいたのですが、それが実際どういふことなのかは、よくわかっていなかったんです。ですので、加工方法がこんなにたくさんあるといった技術的な話をお聞きできたのは、とても勉強になりました。

石川 ● 木材利用を推進する側は、もっと積極的に伝えたいいけないことがたくさんありますね。そこでお聞きしたいのですが、もし「木」を使うことをアピールするのなら、どういった点だと思えますか？

柿木原 ● 最近、ログハウスの会社の仕事をしているのですが、取材にいくと何より木の香りが気持ちいい。樹木の育った環境から含めて素材を楽しむことをコンセプトにしている企業で、「木」という存在そのものに価値があるとすごく感じます。

柿木原 政広 (かきのきはら まさひろ)

1970年広島県生まれ。デザイン会社ドラフトを経て2007年に(株)10(テン)を設立。JAGDA会員。東京ADC会員。主な仕事にsinging AEON、まいにちAEON CARD、R.O.Uのブランディング、東京国際映画祭、静岡市美術館、松竹芸能株式会社、富士中央幼稚園のCI、美術館のポスターを多く手がける。2003年日本グラフィックデザイナー協会新人賞受賞。NewYork ADC賞、グッドデザイン賞ほか。



巻頭●鼎談

「見え方」も重要なのですが、「あり方」のデザインも重要だと思っています。

宮本 ●木のいいところは、たくさんあると思うんです。一方で、その木の魅力だけにあぐらをかいてはいけないという思いも研究者としてはあります。素材として検証された長所や短所をしっかり説明して、木の魅力を発信しないといけないと思うんですね。

柿木原 ●グラフィックデザイナーにとって、いちばん身近な木って紙なんです。紙にはじつにいろんな質感や印刷特性のものがあって、好みの紙は必然的に決まってきます。ところが、いま仲間たちと富士山麓で山小屋をリフォームしてるのですが、いざ木を選ぶ状況になると、自分にとって心地いいものとか、好きな配色だけで、安易に決められない自分がいます。そこで、壁の色をグレーにしたんです。それなら、家具のアンティークな色調も合うし、明るい色の木を合わせても違和感がない。グラフィックデザイナーの視点からみると、木の機能性を活かしつつ、やはり木の持つデザイン性に目が行きますね。

石川 ●機能性とデザインのバランスって、とても難しいですね。

柿木原 ●伝統的な漆喰の白とか、単純に色だけではない素材のあり方みたいなこともだいじですね。「見え方」も重要なのですが、「あり方」のデザインも重要だと思っています。

そういえば、たまたまテレビで木を倒す技術を教える番組をやっていて、伐りにくい場所の木を伐るときに、回しながら倒す技法をサッとやってみました。うわあ！カッコイイなと思ってたんです。これこそが「技」じゃないですか。そういった技術がそこに存在す

ることがカッコイイし憧れになる。本来、人が生きていく上で必要だった木との接し方みたいなものがみえてくると、素直にそれをやってみたくて、使いたいという人も増えていくんじゃないかなと思うわけです。するとたとえば「木こり」という言葉にしても、古いイメージから、こんどは新しい「木こり」になる可能性もあって、若い人たちが自分の職業は「木こり」と胸を張って答えるような林業のデザインの方向性が見えてくるんじゃないかなと、そんなことを思いました。

石川 ●林業に関わる人たちがやっていることは、じつはとても奥深くて広がりのあることですが、そこになかなか気づけない。その部分を掘り起こして、視点を変えた新たなコンセプトでみるのができたらと思うんです。その時にネーミングは重要だな。今回、柿木原さんがデザインをされた木材加工技術協会のロゴは、端っこに欠けを作ってますが、そのことだけでもう一気に雰囲気ガラッと変わるわけですね。そうすると「木こり」というネーミングをそのまま使うのか、「木こりプラスなんとか」にちよこつと変えるのか、気になります。

柿木原 ●もし「木こり」のロゴを作れと言われたら、「木こり」にプラスαはせずに、「木こり」という書体自体にちよつとそういうニュアンスを入れるようにたぶん頑張ると思います。木材加工技術協会のロゴも、つなぎ合わせのところで少しだけアール(角を丸くする)をつけたりにしているだけなんです。

宮本 ●見ようによつては、それこそノコの歯



柿木原さんが仲間たちとリフォームを続けている富士山麓の山小屋(右)。スタッフとともに壁の板を切る柿木原さん(左)。提供＝柿木原政広

* Key Words (公社)日本木材加工技術協会のロゴマーク作成

(公社)日本木材加工技術協会は、環境負荷の少ない適正な木材加工・利用に関する学術の振興と技術の向上及び普及を図るために活動している協会。2018年の創立70周年記念事業の一環として、ロゴデザインの一新を柿木原さんに委託した。





石川 敦子 (いしかわ あつこ)

1968年東京生まれ。1992年東京農工大学農学部卒業。1997年東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了、博士(農学)。同年、森林総合研究所入所。現在、木材改質研究領域長。木材の気象劣化とその抑制などに関する研究を行い、木材の屋外利用に関連した講師や複数の事業の検討委員を務める。

巻頭●鼎談

木材利用を推進する側は、 もっと積極的に伝えないといけないことがたくさんあります。

に見る人もいるし、木材がつかっているところを見てもいるかもしれない。見る側によって捉え方が変わるのが非常に面白いですね。

石川 ●わたしは、木塀を思い起こしました。

柿木原 ●勝手に連想してもらえると嬉しいですね。どうしたらできるかというところは意図しています。

石川 ●木塀にみえてよかったんですね！(笑) それにしてもロゴが変わることで、協会のイメージも大きく変わったと思うのですが、なかなか人に目を向けてもらえないこうしたジャンルに、どうやって目を向けてもらうかは、じつに悩みのタネです。

柿木原 ●いろんな業界のブランディングをしますが、その業界に存在意義があれば、求人でも勝手に人がくると思うんです。でも、ほとんどの業界の人は、「いやあ、うちの業界、人が集まらなくて」と言う。ところが、存在意義を明確に伝えると若い人は寄ってくる。業界や素材自体が持つ能力の魅力を意識化してやると人は集まってくる。

宮本 ●どういう形でアピールするかはたぶん永遠の課題で、悩みながら、あの手この手やってきて、正解はないと思うんです。研究の世界だけでなく、世の中の流れもあって、木材利用に目を向けてもらうための発信の仕方が、なかなか難しいですね。

柿木原 ●難しいのですが、簡単な気もするんですね。単純に「木の持つ能力を信じてみる」みたいなそういうことだったりもします。

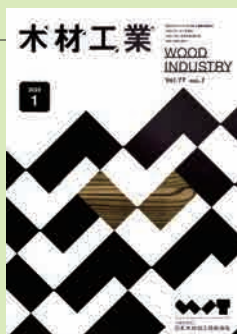
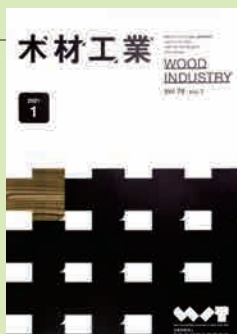
最近、ちょっと気になったことがあって、それは、木材ではないけれど木材のように見せている素材があるじゃないですか。それっ

て本来は、木材同様には人を癒やす機能はないと思うのですが、でも、それが使われている施設で、「なんか癒やされるな」って言った人がいて、それって何なんだろうって思っただけです。木に対しての前もっての情報がその人の精神的な癒やしに繋がったのかもしれないし、無垢の木材でなくてもそういう効果なり、機能なりを感じてしまう人間の側の能力なのかもしれない。そう考えると、もしかしたら木材の顔をしているということだけでも価値があるのかな、と思うときもあるわけです。自分としてはやはり木は木であってほしいと思うのですが、デザイン的に木材のよいに見せることで価値が生まれるのであれば、それは受け入れてもいいのかなと思ったりもするわけです。そこは正直、自分の中で答えを見出せていない部分ですが。

宮本 ●適材適所ということはあると思いますが、やはり雨がかかるところには、耐水性が高い素材の方がよいといったこともありますよね。そのとき見た目の点でプラスになることもありそうですね。

柿木原 ●某美術館のワークショップブルームの床は木目がプリントされた素材で、そこはワークショップで絵具やノリをこぼしたりして汚れてしまうので、メンテナンスも考えて、そうした素材を使っているんですね。建物自体はちゃんとした木を利用して、木を使うことは大切にしている。そうした使い分けは必要だし、面白いと思います。

宮本 ●丸太に近いものから、木材を砕いたチップだったり、あるいはミクロレベルの素



日本木材加工技術協会の月刊機関誌「木材工業」の表紙も、ロゴマークをパターン化してデザインされている。Vol.74,76,77の各1月号。



宮本 康太 (みやもと こうた)

1973年神奈川県生まれ。1996年静岡大学農学部卒業。2002年岐阜大学大学院連合農学研究科博士課程修了、博士(農学)。同年、森林総合研究所入所。現在、複合材料研究領域複合化研究室長。木材の接着や木質材料の製造と性能評価に関する研究に従事。各種木質材料の規格原案作成など、関連分野の委員を多く務める。第49回林業科学技術振興賞(研究奨励賞)受賞。



巻頭●鼎談

木材利用は幅広く奥深い。 どのように発信するか、工夫を凝らすことが大切です。

材まで木材の利用の幅はじつに広いんです。見た目木材でなくても木材を使っているものもありますし。そういう最先端の木材利用をもっとアピールする必要があると思います。

柿木原 ● 塀などは広い面積があつて、グラフィック的にもいろんなことができそうだなと思います。

石川 ● エクステリアは比較的長く使うのが理想なんです。場合によっては部材交換をしながら、リニューアルしていくという使い方もありますね。短期間に対するデザインと長期間に対するデザインとで、何か意識されてつくられたりしますか。

柿木原 ● それは相当あります。たとえば展覧会のポスターとか3カ月くらいの期間のものに対してのロゴタイプと、50年、100年とか使う会社のロゴタイプでは、同じ感覚ではつくりません。引っかけがいいということは、飽きるのも早かったりするんです。引っかけよりも良くて、飽きないというのが理想です。エクステリアで壁面の改装期間が5年ぐらいに設定されているとグラフィックの幅、自由度がぐんと増すと思います。いちばんいいのは、木の素材そのもので、たぶんその素材の色だったりとか、ニスを塗った時はどうかとか。条件によっては焼き杉みたいに素材の変化によって、壁面を楽しむと面白いんじゃないでしょうか。

石川 ● 使用期間の長い箇所は飽きにくく、短い期間で改装できる箇所では、遊び心があるといいのでしょうか。

柿木原 ● 防波堤に地元の小学生が絵を描いて

いたりしますね。あれってたぶん、何年かたって、当時10歳だった男の子が20歳になってからそれを見ると、ただのデザインとはちがう何か別のものが生まれてると思うんです。

石川 ● 防波堤に関わった人の物語がそこに入ってくるのでしょうか。

柿木原 ● 公共的なものなら、その場との「あり方」を見つけないという視点は大事ですね。地域の人たちと一緒につくと、その壁面自体が、別の意味を持つてくると思います。

宮本 ● 柿木原さんがロゴマークをデザインされた静岡市美術館とは、ずっと関わりをもたれていますね？

柿木原 ● 静岡市美術館でいちばん最初の展示をされたアーティストの鈴木康広さんが、それから10年後に、最初の展覧会の時に撮った写真にたまたま写り込んでいた男の子を招待して、同じ画角で写真を撮るということをやっただけです。その地域に関わる10年がそこに象徴されている感じがあつて、すごく楽しかったです。

石川 ● デザインや表現における時間というのは興味深いですね。同じものでも、時とともに何かが違う趣になっていきます。

柿木原 ● 木の場合は、あめ色になるとか、使い込んでいい味になるとか、価値がプラスされるので、うまく利用すると勝手に価値が上がっていく面がありますね。

石川 ● 木はそもそも1本1本に味わいの違いがあります。自分ではこういうものを作ろうとイメージしていても、出てきたものの味わいは自分が思っていたものとは違う新たなも



柿木原さんが作成した
静岡市美術館のロゴマーク。
提供=株式会社10



◎柿木原政広さんの絵本



『ほんちんぱん』
(福音館書店)

巻頭◎鼎談

人の捉え方の柔らかさを逆に活かしてやることは、デザインではかなり意識してますね。

のが、生み出せる可能性もあります。

柿木原 ●デザインで重視していることに「勘違い」というのがあります。スタッフとの打合せでやや見当違いの意見がでることがあって、それが逆にブレイクスルーでできなかったものを、いきなり自由にしてしまうみたいなことがあったりします。そんなふうには人の捉え方の柔らかさを逆に活かしてやることは、デザインではかなり意識してますね。

石川 ●いいですね「勘違い」。

宮本 ●発想の柔軟性は大事ですね。木材は節もあって、均質さを厳しく求められると難しいところもありますが、全体に良い素材として、大らかに捉えてもらえるといいのですが。

柿木原 ●寛容さは求められますね。でも「割れてるじゃん」と言われて、「木ですから」ではさすがに納得してもらえないでしょう。

宮本 ●もちろん、用途的に求められる性能は発揮しないといけないわけで、そうした性能は、定量的に表す必要があります。とはいえ、たとえば気持ちや見た目の心地よさといった感覚的なものを数値にする難しさはあると思います。

柿木原 ●おそらく、みんな直感的には「木はいいよね」ってほぼ100%思っていると思います。とすると、じつはそこは説明しなくてもいい部分なのかもしれません。

堀にしても、素材として木は求められていると思うんです。あとは堀に何を求めるか。

石川 ●かつては堀は境界線の役割を担っていましたが、現代では境や囲いといった機能以外の別の役割を考えてもいいと思うんです。

柿木原 ●自分かもし堀をデザインするとしたら、猫の通り道を意識してチョコチョコ登れるところがあったり、あるいは小鳥が巣をつくれたり、そういった遊び心のある堀ができるといいなあと思ったりします。

宮本 ●子どもが登れる堀とかもいいですね。遊べる木堀でいいですよ。

石川 ●それこそ、遊びを兼ねた猫のためだけの堀とかがあってもいい。家を建てる時にはどうしても建物にばかり目が行きますが、じつは堀は景観全体に影響する重要な部分なんです。木堀は、これから進化できるポテンシャルがまだまだあると思います。

宮本 ●木堀はその気になれば、自分で作ることもできますしね。

石川 ●木堀を手づくりする過程で木材のことを知ったり、つくって使っていく過程を楽しむこともできますね。

なにしろきょうは、異分野の方とお話できて、私はとても刺激を受けました。5年後にまた鼎談が実現して、時間の変化を語りあえるといいですね。

柿木原 ●わたしも刺激を受けました。きょう敷地を案内していただいて、この広い空間に数百人もの研究者が森林や木材について研究しているということは、すごいことだと思えます。5年後には、きっと木材の高層ビルがどんどんできていくんじゃないでしょうか。

宮本 ●斬新なデザインの木堀とかが流行してたり……。木材利用の新時代は、いま歩みが始まったところです。これからさらに大きく広がっていくことを願っています。



柿木原さんに森林総合研究所内の研究施設について案内する石川さん、宮本さん。



◎柿木原さんが装丁した事典。石川さん、宮本さんが執筆している。

『最新木材工業事典(新版)』
(日本木材加工技術協会)